

プロレタリア文学の中の植民地主義

伊藤永之介「万宝山」を読む

鳥木圭太

はじめに

伊藤永之介「万宝山」は『改造』一九三一年一〇月号に掲載された。この小説に描かれているのは、同年七月一日に中国吉林省で起こった朝鮮人農民の開墾をめぐる中国人農民との武力衝突事件（万宝山事件）である。

事件の発端は、一九三一年四月一六日、中国人ブローカー郝永徳（長農稻田公司支配人）が万宝山附近の土地三〇〇ヘクタールを、中国人地主二人より一〇年契約で借り上げ、これを直ちに九人の朝鮮人農民に転貸したことにある。¹⁾

土地を借り受けた九人の朝鮮人は間島の頭道溝に居住しており、彼らは周辺に居住していた朝鮮人農民約二〇〇人を集めて、伊通河の近く馬家哨口から水路を掘り始めた。²⁾

五月末に入り、郝の口頭での許可のもと、水路の建設が始め

られるが、附近の中国人農民らは工事の中止を求め長春県当局に訴え出た。この請願を受けて県公安局は数度にわたり局員を派遣し、工事停止を命じたが、朝鮮人農民側はこれに応じなかったため、五月三一日には長春県当局が二〇〇人の保安隊を派遣し、九人の朝鮮人代表を逮捕、水路からの退去を命じた。これに対し長春の田代領事は逮捕者の即時釈放を求め、六月二日には領事館警察官五名を派遣し、工事を続行させた。公安局側も翌日一〇〇人の武装騎馬警官と三〇人の徒歩警官を派遣し、日本側も急遽警官を増派したため、問題は農民間の争いから日中官憲同士の対立へとエスカレートしていった。双方の交渉は平行線をたどり、日本側は一二日警察官を再度派遣し、その保護下に工事を続行した。同二六日には水路はほとんど完成し、伊通河の堰止め工事に着手した。これに対し中国農民側は七月一日、附近の数十村の農民五〇〇人あまりを集め、水路埋め立てを強行した。田代領事はすぐさま警察官九名を現地派遣し、

水路を挟んで中国人農民と向かい合った。その際、双方から発砲があったことを受け、日本側はさらに四〇人の武装警官を増派し、中国側も三〇〇人の警察官を現地に急行させた。にらみ合いが続いたまま事態は両国間の交渉に移ったが、日本側は圧倒的な武力を背景に工事を強行し、水路を完成させた。

この衝突による死者は出なかったものの、『朝鮮日報』『京城日報』による扇情的報道の結果、朝鮮国内における中国人排斥事件へと発展し、多数の死傷者を出すこととなった。⁽³⁾

伊藤永之介「万宝山」はこの事件を題材に、故郷を追われ満洲に流れてきた趙判世(チョパンセ)・裴貞花(ペジョンハ)夫婦を主人公として、日本と中国の領土をめぐる対立の狭間で辛酸をなめる朝鮮人貧農の姿を描き出した。作品末尾に「一九三二、七、二五」とあるように、事件発生から一ヶ月という驚くべき早さで執筆された本作は、当然のことながら事件の顛末を完全には反映できず、「万宝山事件は形としては中国東北地方での朝鮮農民の生存権を日本の警察が守るようにして展開していった。それが伊藤の「万宝山」の中では、日本警察が傍観者の態度を取って、中国側と日本、朝鮮側の力関係が事実とは逆転してしまう」と任秀彬が指摘しているように、情報の不備、あるいは検閲を意識したと思われる箇所が見受けられる。

しかし、わずかな事件報道を頼りに作者の想像力を駆使し、ある意味では強引な解釈によって書かれたともいえる本作は、

当時朝鮮人農民の置かれていた苦難を主題として前面化しつつ、その背景に日本側の朝鮮人農民の利用政策があることを告発することでプロレタリア文学の面目を保った作品ともなっている。本稿は、この植民地主義の問題を描いた伊藤永之介「万宝山」を手がかりに、プロレタリア文学運動の中に生起した開拓と占領の記憶を手繰り寄せる試みである。

一 開拓の記憶

趙判世と裴貞花、五歳の長男大秀(テス)は、「朝鮮の故郷を追ひ出され、満洲での永い放浪生活」の末に、万宝山へとたどり着く。ここでは開墾した水田に水を引くための水路掘削作業が行われ、趙も多くの同胞たちと共に作業に従事することになる。趙たちは、中国人警官と、彼らと結託した中国人地主、商人たちから「県指定の」農具を購入することを強要されたり、家計のたしに「夜業」をして拵えた「柳斗子」(リュートウツ)柳で編んだ種籠)までも取りあげられるなど、圧迫を受けながら日々を送っている。

「何だ、そりや、柳斗子ぢやないか」

黒い顔に菊面のある巡警は前に屈んで、趙が出した柳斗子を鉄棒に引っかけて、グイと引ツ張った。

「こつちへ出せ、お前は許可を受けてるのか、指定のもの

以外勝手に売り廻はることはならん」

狡そうな眼の支那人は、猫のやうに素早く、二つの柳斗子をひつた。〔万宝山〕¹⁾

このように小説「万宝山」は万宝山事件における朝鮮人農民たちを抑圧する具体的な存在として、中国人地主や官憲の姿を前景化しているが、これは実際に当時の国民党政府が朝鮮人移民を圧迫していたという事実に基づいている。

中国東北部における朝鮮人移民は、一九三〇年末には六〇万人に達していた。その六割が東部の間島地方に集中し、多くが小作農兼雇農として厳しい生活を強いられていた。これは、日韓併合以後の「土地調査事業」「林業調査事業」における申告制度や、会社令を名目とした日本資本による土地収奪により、農民の離村現象が促進され、多くの朝鮮人が移住、開墾に従事していたことによる。こうした背景のもと、間島地方は日本・朝鮮・中国・ソ連各国の利害が複雑に絡み合う地域として、朝鮮独立運動の拠点、民族運動、共産主義運動の拠点として推移していくことになる。日本は「北満物資の開発・輸送と満蒙進出の立脚地」(東亜経済調査局『間島問題の経緯』一九三二・六)として、間島地方を梃子に満洲進出を期することとしていたが、そのために推進されたのが、中国の間島領有権確立と引き替えに朝鮮人の間島における土地商租権を保障する間島協約を拡大解釈した朝鮮人移民の利用であった。

これは端的に言えば、日本国籍(半島籍)を有する朝鮮人移民に、中国国籍を取得させ、中国の土地を買収させようとするものであった。さらに、治外法権を口実に朝鮮人に警察権を行使するため、朝鮮総督府は朝鮮人の「日本国籍」離脱を認めなかった。国民党政府はこれに対抗するため、同様に朝鮮人に中国国籍を与え、彼らに対し中国の主権を及ぼそうとした。緑川勝子は、国民党政府による朝鮮人の取締は、朝鮮人の二重国籍問題に端を発した警察権問題及び土地商租権をめぐる日本との攻防であったことを指摘し、国民党政府は「朝鮮の独立の問題と自己の主権回復との有機的関連性を認識し、それを自己の運動内部に於て展開させることができなかつた。この為、東北の朝鮮人を日帝の「尖兵」としてしか評価し得ず、その結果単純な民族排外運動に流れていった」と批判している。⁵⁾

こうした日中双方による二重国籍政策の推進の結果、間島地方における中国と日本の主権争いは、朝鮮人農民の身体をめぐる警察権の攻防として表面化していくことになるのだ。

小説「万宝山」は、こうした朝鮮人農民の身体をめぐる日中双方の警察権争いを浮き彫りにしていくが、同時にここで明らかにすることは、朝鮮人農民たちに与えられた日本の保護は、彼らが「帝国臣民」であるが故に与えられる保護ではないということだ。それは端的に「満蒙権益」に対して与えられた保護であり、趙判世たちは、彼らの存在が「満蒙権益」と同義である場合においてのみ、「帝国臣民」たることを要請されてい

る。宗主国と被植民地民双方を結びつけるこの利害関係の一致点においてこそ、「帝国臣民」たる朝鮮人という幻想が立ち上がるのだ。しかし「万宝山」では、こうした幻想は遂に描かれることはなく、趙判世たちはその後大日本帝国の臣民としてアイデンティファイされることは決してないだろう。このことは、再び流浪を余儀なくされる主人公たちの姿を描き出すラストシーンに最もよく現れている。

百人近くの女や子供たちは、ただ押し黙ってボソ／＼と歩いた。彼等は言はばかうして、故郷を追はれ、国境をさ迷ひ出で、涯しない満洲の広野をあてもなく歩いて来たのだ。またそれが始つた。(中略)

もう平原に出て居た。群衆は漕でない闇にほの白くのろ／＼と流れて行つた。工事場の柳條リユーヤオ、タンピンに当兵が放つた火は、まだ東の空をボーと明るませてゐた。

霧に濡れた平原を、白衣の群れは長春チヤンヂユンの方へ何処迄でも揺れ動いて行つた。(「万宝山」7)

裴貞花たちは、水路の完成を見届けることなく、再びあてのない流浪を強いられることになる。

ところで、朝鮮を舞台にした小説『楮土に芽ぐむもの』(改造社 一九二二)や「不逞鮮人」『改造』一九二二・九)で知られ

るプロレタリア作家中西伊之助は、この時期こうした朝鮮人農民の迫害問題についても精力的に執筆している。『中央公論』一九三一年一二月号に掲載されたルポルタージュ「惨たり！在満朝鮮同胞」は、柳条湖事件後の朝鮮人農民への報復的迫害の実情を詳しく報告している。ここでは難民化する朝鮮人農民たちの実情が描かれ、その後の裴貞花たちの行く末を暗示するような悲惨なエピソードの数々が紹介されている。

翌日、私はH氏に伴はれて、避難鮮人の泊つてゐる撫順附近の農家に行つてみた。

その家は、それでも二間の温突(ここは支那式の爐になつてゐた)を持つてゐた。が、一室は四畳半、一室は三畳くらゐのもので、その二間に三十人近くの男女や子供が溢れてゐた。何しろ撫順附近へは千人近くの避難民が押しかけてゐるのであるから、或はこのくらゐのことは当然かも知れない。支那人に変装してゐるものが多かつた。(「惨たり！在満朝鮮同胞」)

朝鮮における対日抵抗運動からも抑圧される朝鮮人農民たち(6)は、中国国内における朝鮮人圧迫を受けて、避難民となりながら朝鮮国内に帰ることができず、広大な満洲の大地に離散していくことになつたのだ。

二 「民族」の隠蔽

ところで、このように満洲における「朝鮮人同胞」の窮状を訴えつつ、日本の大陸政策の手法を暴露する意図を持った野心作「万宝山」は、当時どのように評価されたのだろうか。

「万宝山」の同時代評としてよく知られる宇野浩二「文学の眺望」『改造』一九三二・一一は、次のように本作を高く評価している。

この作に現れるのは朝鮮人の百姓の一家だけではない、彼等と共に生れ故郷にゐられなくなつてさ迷ふ民族の苦痛が現されてゐる。やつと逃れて来た土地から追ひ出されて、「霧に濡れた平原を、白衣の群は長春の方へ何処迄も揺れ動いて行つた。」といふのが最後の一節である。この白衣の群が荒涼たる満洲の自然と戦ひ、狡猾な支那人に迫害され、××な××××に圧迫され、時には砲火や銃声や兵隊の馬蹄の響きやに脅され、真に餓えと死の恐怖に襲はれつゝ生息（生活ではない）してゐる有様——かういふ生温い言葉でいひ尽くせない程、この作は近頃の私の読んだ小説の中で心を打たれた作の一つである。

ここで述べられているように、宇野は作中での朝鮮語の多用をはじめとする、朝鮮人農民たちの細かな日常の描写から、被

抑圧民族の運命そのものを読み取っている。任秀彬はそれを可能とした条件として、次に引用する伊藤の自叙伝に描かれた朝鮮人同居者の存在を指摘している。⁷⁾

今にして思へば、なるほどなまじつかなところでジャーナリズムの流れに乗らうなどと試みない方がよかつたのであつたが、私は幾分不服な顔つきで、そのころ上京して来た弟と、植民地を描いた私の作品を読んで訪ねて来てゐるうちに失業して転げこんで来た朝鮮の李君とを加へた六人の家族を、わずかな編輯手当てだけでやつて行かなければならないといふ一寸言葉では言ひ様のないほどひどい貧乏な家を振返りもせずに「文芸戦線」の編輯の仕事で駆け廻りつづけた。(中略)：困窮はいよいよ加はつて来るばかりであつたので、私は思ひ切つて一時一家離散の旨を宣言した。それで子供は女房の叔母のところにあづけ、女房は同じ店で働いてゐる同僚と店の近くに部屋を借り、家に残つた私は「万宝山」(改造)を書いたのであつた。(伊藤永之介「文学的自叙伝」浦西和彦編『伊藤永之介文学選集』和泉書院 一九九九 初出は『新潮』一九三九・二)

また、任は当時伊藤の長屋のとなりの棟に中西伊之助が居住していたことを挙げ、『文芸戦線』同人のネットワークによりもたらされる、朝鮮についての豊富な情報を作品成立の根拠と

して挙げている。⁸⁾ 中西の存在が作品の成立に及ぼした影響の有無についてはひとまず措くとしても、作品の背後には、読者としての朝鮮人との共同生活があったことは注目に値する。本作が万宝山事件を最も早い段階で文学作品として形象化し、被抑圧者として朝鮮人移民たちの姿を可視化したことは、宇野の言うように、一定の評価に値するだろう。

しかし一方で、この作品はプロレタリア文学の陣営からは厳しい批判にさらされることになる。たとえば宮本顕治は、「藤森成吉の「転換時代」・その他」(『東京日日新聞』朝刊一九三二・九・二五)の中で、本作を「万宝山事件の本質的契機をなす帝国主義的矛盾の鋭い対立は本質的な展望においては勿論描かれてゐない」と切り捨て、「産業労働時報八月」の「万宝山問題」を読んだ方が「問題の本質」をつかむことができる」と述べている。宮本の批判は、小説が事件の現象のみを取り上げ、その背後にある日中朝各国の力関係や搾取の実態といった、事件の本質を読者に明示していないとするものである。

ここで宮本が小説に對置している左翼系労働機関誌『産業労働時報』(一九三二・八)の該当記事を確認すると、「万宝山問題——満洲を中心とする戦争の切迫——と題し、満洲における日本權益を、次のような經濟学的観点から分析している。

以前長春附近の三姓堡に移住し来り、水田經營を営んで居た九人の朝鮮人農業資本家は、長春の北方約三里万宝山

の麓に可成り広大な平原が未開墾のまゝ残されてゐる事に着眼し、そのうちの最有力者李某は長春の鮮人救済協會——背後には日本領事館——から二千元の融通をうけ、今年二月に支那人ブローカーをして「長春稻田公司」といふ幽霊会社を設立させ、会社名義で同地方支那人地主十二名から約三千町歩の土地を借りうけた。この契約が成立する為には猶、県政府の認可をうけねばならなかつたのだが、日本帝国主義を背景に持つ朝鮮人資本家はそんな手続きなどは問題にしなかつた。彼等の計画は水田を作る事にあつたので何処からか水をひかねばならぬ。それには南方約十五支里伊通河から導くのが最も便利である。併しその土地は全部支那地主の私有地になつて居り、これを借りるとなればまた面倒である。この間の交渉に就て我々は正確に知る材料を持ち合せては居らぬが、恐らく充分の代償を提供する事なしに朝鮮人資本家共は力づくで開墾工事を開始したのであらう。兎も角苦力が極めて安い賃金で雇ひ入れられ工事は四月から始められて六月末には九分通り完成した。(傍線は引用者)

ここで注目すべきなのは、事件の首謀者が郝永徳から最初に土地を借り受けた九人の朝鮮人であるとされていること、さらに趙判世たちのような、作業に従事した朝鮮人小作農の存在が綺麗に消去されていることである。これにより、事件の構図は

朝鮮人地主と彼らに低賃金で雇われた苦力たちというように単純化されてしまっている。確かに、昭和恐慌期における朝鮮農業の実態についてみる時、一部朝鮮大地主による小作農の搾取があったことは従来の研究によっても明らかにされている。⁹⁾

しかし、このように事件の構造を地主(＝資本家)によって搾取される苦力(＝プロレタリア)という構図に還元することは、そもそもこの九人の朝鮮人地主たちがなぜ故郷を離れ満洲に土地を求めたかという根本的な問いをも封殺していく。¹⁰⁾

つまり、事件の構図が宮本顕治のいう「万宝山事件の本質的契機をなす帝国主義的矛盾の鋭い対立」に還元されることで、朝鮮人地主を資本家と見る認識が導きだされ、現実の壁——複雑に構成されていたであろう社会諸階級の階層構造は見失われていく。すなわち、「階級」問題が「民族」問題を隠蔽していくことになる。

三 植民地と農民文学

日本の大陸経営により引き起こされた民族問題に対して、これを階級問題とみなす認識は、どのような意識によってもたらされたのだろうか。次に、この問題をプロレタリア文学運動における農民文学との関わりから考えてみたい。

日本の満洲進出と時を同じくして、プロレタリア文学運動においては、農民文学が大きなテーマとして取りあげられること

になる。

一九三〇年十一月、ソ連のハリコフにおいて、国際革命作家同盟第二回大会(ハリコフ会議)が開催され、日本からは日本プロレタリア作家同盟(ナルプ)の藤森成吉と、当時ベルリンに滞在していた勝本清一郎が代表として出席している。この会議において、「日本に於けるプロレタリア文学運動についての同志松山(引用者注、勝本)の報告に対する決議」が採択され、一九三二年二月号の機関誌『ナツプ』に掲載された。その三つ目に次のような決議がなされている。

国内に大きな農民層を持つ日本にあつては、農民文学に対するプロレタリアートの影響を深化する運動が一層注意される必要がある。日本プロレタリア作家同盟の内部に、農民文学研究会が特設されなければならぬ。しかし言ふまでもなく、それがあくまでもプロレタリアートのヘゲモニーの下に置かれなければならぬことは、勿論である。

これを受けて、作家同盟内でも直ちに農民文学研究会が設置され、研究会による単行本『農民の旗』が一九三一年一月に新潮社より刊行された。ここに収録された柴田和雄(蔵原惟人)「農民文学の正しき理解のために」は同年の『ナツプ』七月号に掲載されたものの再録であるが、蔵原はここで「現代日本の農村は、決して『農民』一派が考へてゐるやうに一色の農民か

ら成るものではなくて、地主や富農から貧農や農業労働者に到る様々の階級若しくは層に分割されて居り、そしてその各々の階級若しくは層は夫々異なつた欲求、夫々異なつた努力を代表してゐる」と述べ、農村の現状を資本家化しつつある地主と小作人の階級対立と捉える認識を提示している。

さらに、蔵原は農民と都市プロレタリアートとの関係について、次のように述べている。

農民の大部分は小所有者であり、小ブルジョアである。従つて彼等は、資本主義との決定的闘争に於て動揺する可能性を持つてゐる。そこで我々は彼等のこの動揺をもつと少くし、彼等の勤労的部分をして、ブルジョアの搾取者部分と対立せしめ、彼等の闘争をブルジョア民主主義的なものから社会主義的なものにまで高める為に、農民に対するプロレタリアートのヘゲモニーを、確保する必要がある。

したがつて、プロレタリア文学者が農民文学を書くにあつては、次の点が喚起される。

この××的な貧農の欲求、このイデオロギーの上に立つた文学は（中略）まだそれ自身ではプロレタリア文学ではない。それをそう呼ぶことは、たゞ単に理論的のみにでなく、また政治的に誤謬である。何となればそれは農民文学に対

するプロレタリア文学の指導といふことを曖昧にするから。

こうした蔵原の農民文学の主張は、農民と都市プロレタリアートの階級的異質性を前提として、貧農（小作農）と自作農及び地主階級との階級対立に主眼を置くものであり、農民文学とは「革命的貧農」の文学であり、あくまでもプロレタリアートのヘゲモニーのもとに置かれなければならないという結論に到るのだ。

これに対し、伊藤永之介が所属していた労農芸術家連盟（労芸）でも、ハリコフ会議の決議をめぐり議論が交わされた。労芸所屬の評論家檜六郎は「文芸時評 農民作家の「用意」についての走り書」『文戦』一九三二・一一）の中で、「ハリコフ大会が、世界プロレタリア文学当面の日程として農民文学をとりあげたのは、絶対に正しい」としながら、次のように述べている。

私の立場は、むしろ、農民文学をいふところのプロレタリア文学と対立の関係にあるものではなく、反対に、農民文学は一般プロレタリア文学に内包されつゝも特殊的存在の必然性と必要性とを有するものと規定するにある。換言すれば、あくまでマルクス主義的世界観を出発点としながらも、その対象が『農民』ないしは『農業の生産関係』といふ特殊性によつて一定の制約を受けることを認めるも

のである。従つて、農民文学には、一定の特殊性が存在するが、窮極においては、それは、プロレタリア文学、ないしマルクス主義文学の一般的性質によつて、あくまで規定されなければならない。従つて、いかなるかたちにおいて、農民文学とプロレタリア文学とは対立はもちろんのこと、並立、並存のごとく同格視することは、意味をなさぬことと思ふ。

このように見てくると、ハリコフ会議決を受けて浮き彫りとなつた、ナルブと労芸それぞれの農民文学に対する認識の違いは、農民文学とプロレタリア文学の異質性については認めつつ、前者を後者に包摂するか否かという点に集約できるだろう。むしろ、ハリコフ会議以前は両者の違いは不分明で、この議決を起点として農民文学に対する両者のスタンスがはっきりしてきたともいえる。逆に言えば、ナルブも労芸も、ともにこの問題を階級問題として認識するという点では共通していたのだ。ナルブの認識も労芸の認識も、ともにマルクス主義階級史観に基礎を置く以上、それは当然といえれば当然の帰結である。しかしこうした認識が、そのまま植民地の問題に適用される際に、問題点が浮き彫りとなるのである。

では「万宝山」を描いた伊藤永之介は、この農民文学問題についてどのように向かい合つたのだろうか。伊藤は「農民文学のために」『文戦』一九三三・七の中で次のように述べる。

然らば貧農を取り扱ふことの意義は何処にあるか？それは単に貧農が酷い搾取と圧迫のもとに喘いでゐるからではない。それはブルジョアジーとの決定的対立に於けるプロレタリアートの同盟の本隊であるからである。したがつて、貧農の中に発展しつゝあるプロレタリア性、革命性を明確にとらえるところに、貧農を文学の舞台に登場させる意義がある。

ここにも農村問題を階級問題としてとらえるという観点があるのは明らかであるが、しかし伊藤は、

極左文学の論者たちが、プロレタリアのヘゲモニーの問題を注入的にしか理解しなかつたのに対して、青野氏が農民のなかに生起し発展しつゝあるプロレタリア性に、即ち内部から発展するものと外部からの意識性との結びつき、その弁証法的統一に、問題の具体的な基礎を置いたことは、問題の確立のための確固たる指針である。

と述べて、プロレタリアートのヘゲモニーにもとづく農民への指導を否定し、両者の意識の弁証法的・発展的なあり方を主張する。堀江信男は、この時期の伊藤のこうした考え方について、「貧農をとりあつかいながら、むしろ」他の農民層に対する貧

農の革命的優位性」というプロレタリア文学運動理論から解き放たれたところ」に、この後の「鳥類物」と呼ばれる農民小説の成功が生まれたと評価している。⁽¹⁾

ところで、このような農民文学の前景化が、伊藤の創作活動に与えた具体的影響の一つとして、「万宝山」単行本収録時における固有名詞の消失が挙げられるだろう。この点について、任秀彬は次のように指摘している。

「今の言葉でいへば報告文学といつても差し支えないやうなものであるが、自分では決してさう言ったやうな実用だけのものに終わってゐないと思つてゐる」と作者自身が述べているがその工夫のひとつが固有名詞の変容である。長秋―長春、井通河―伊通河、橘林省―吉林省、三世堡―三姓堡、三荷屯―三家屯、峰天―奉天、間島―関東のように、日本語で訓読みした時に同じ漢字を使って（長秋―長春を除く）、虚構の舞台を作ろうとしたのである。（『満洲』・万宝山事件（一九三二年）と中国、日本、韓国文学―李輝英・伊藤永之介・李泰俊・張赫宙―前出）

また、佐賀郁朗も本文の異同について次のように指摘している。

日中戦争が激化した昭和十四年に刊行された新潮社版

『鴉』に収録された「万宝山」では、発禁処分を免れるためであろうが、原文の満洲と万宝山をすべて消したり、この地方、その地などとすり替え、長春を長秋に、奉天を峰天とごまかしている。しかも、引用した部分は原文を書き改め、伏せ字をなくして次のように半分たらずに短縮されている。（『受難の昭和農民文学―伊藤永之介と丸山義二、和田伝』日本経済評論社 二〇〇三）

ここで佐賀が指摘する、初出から単行本収録時の異同部分は以下の通りである。

――鮮農の背後には××（日本）がある、支那に帰化した鮮農の名義で×××（日本人）が田地を買入れた。満蒙百数十万の鮮農を手先として、××（日本）は次第に膨大な土地を自分の手に入れるだらう。

が××（黒帽子）は××（鮮農）がどんな××（圧迫）を受けても知らぬ顔をしてゐる。当兵が××（鮮農）を殴つたり蹴つたりすれば、××（日本）はその最も恐れる××××××××（共産主義者を駆逐）出来る。だから支那も××（日本）が喜ぶやうに共産主義取締の名義で、××（鮮農）を荒野にたゞき出し、ブタ箱にプチ込むのだ。（『万宝山』初出 伏せ字は『日本プロレタリア文学集10「文芸戦線」作家集（二）』新日本出版社 一九八五 所収本文により引用者が補った）

その結果は鮮農はどこへまで行つても追ひたてられた。地主に故郷を追はれて国境を越えて来た彼等は、こゝでは当兵の銃で追ひまくられた。落ちつく先々にそれは執拗く追ひかけて来た。「万宝山」「鴉」収録本文)

こうした語句の改編により、「万宝山」は農民文学の一つとして『昭和名作選集18 鴉』(新潮社 一九三九)に収録されることとなる。それはいわば植民地文学の農民文学への改編でもあったといえるだろう。「万宝山」執筆当時の心境について、伊藤自身は次のように述べている。

イドしていくことになる。この文章につづいて、伊藤は次のように述べている。

満洲事変の起つた昭和六年から翌年にかけて書いた「春遠し」「非常時」「採草地」「熊」などが、いづれも凶作を扱つてゐるのは、今にして考へれば、その年の東北地方の凶作がいかに作家としての自分に強く作用したかを物語るものであつた。これは近頃の私の鳥類物の素地を為してゐるものであるが、この凶作から私は本當の意味で絶えず農村に注意を向けるやうになつた。(『文学的自叙伝』同前)

これは植民地小説の一つであるが、「見えない鉱山」「山の一言」「暴動」とつづいた鉱山ものものと足かけ二年の間は、私は絶えず植民地に関する文献を読んだり材料を探したりしてゐて、台湾からはじめて満洲から朝鮮にわたつて四つ五つの植民地ものを書いた。勿論その間には前述の「恐慌」のやうな別な系統のものが無いわけではなく、また植民地ものと並行して農民組合に取材した当時流行の所謂争議小説も書いてゐたが、大体に於いて私の作家的な関心は植民地の上をさまよつてゐた。(『文学的自叙伝』前出)

先の「万宝山」本文の異同と併せて考えると、ここには植民地問題から国内農村の問題へと作者の意識をスライドさせていく認識が作動していたことが見てとれる。その移行はプロレタリア文学運動における、農民文学をめぐる言説によつてもたらされたことは先に見てきた通りである。しかし、そのこと自体は実はそれほど不自然なことではない。なぜなら、日本の近代化過程において、農村が都市による搾取と寡奪にさらされてきたことを考えるならば、東北は紛れもなく国内における植民地であつたからだ。

西川長夫は国内植民地主義と国外植民地主義の差異について次のように述べている。

伊藤のこの「関心」は、満洲事変以降、日本の農村へとスラ

ただ国内植民地という言葉が発せられたと勝手に予測されたはずの一つのことについてだけ記しておこう。それは、国外にあるいわゆる植民地を対象とした植民地主義と国内植民地主義とは本質的に異なるものであるのか、という問いである。その答えは、国家的な、したがってナショナリズムの観点に立てば「然り（異なる）」であろうが、被害者である住民の立場に立てばどうだろうか。あるいは問いを変えて、自国の軍隊による虐殺と他国の軍隊による虐殺とは本質的に異なるものであろうか。その答えはすでに出ていていると思う。あるいは民族資本による搾取と他国の資本による搾取とは本質的に異なるものであろうか。『(新)植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う』
平凡社 二〇〇六)

西川のこの問いを手がかりにするならば、農村の窮乏問題と、満洲における朝鮮人農民の苦難とを並行的に思考すること自体の意味は極めて大きいといわねばならない。「万宝山」に描かれた趙判世たちの苦難を、東北の農民たちのそれと重ね合わせることで初めて明らかにされる植民地主義の問題は確かにあるはずだからだ。

しかし問題は、プロレタリア文学運動における農民文学という問題項が、両者の相似性を浮き彫りにするような言説機構であったかどうかにあるだろう。むしろそれは一方が一方を隠蔽

する役割を果たさなかつたであろうか。そしてこうした観点に立てば、プロレタリア文学運動における農民をいかに獲得するかという命題には、東北を国内植民地として捉える視点があつたのか、あつたのだとしても、それは国外（満洲）における開拓移民政策へとスライドしていく危険性を孕むものではなかつたかという疑問点が常につきまとう。

たとえば、満洲権益は国内における農村の窮乏と密接にかかわり、昭和恐慌下における救農政策としての側面を持つていたことは、すでにこれまでの研究によっても指摘されている。⁽¹²⁾

満洲進出論が具体的な国策と結びついた背景には、昭和恐慌による増税・農産物価格の暴落、物価高騰による農村恐慌が発生し、自作農家も小作農家も農業所得が激減したという事実がある。さらに一九三一年には東北地方を中心に冷害と大凶作が襲い、農村は大きく疲弊した。これらは東北地方を中心とする農家に深刻な打撃を与え、農村における人口過剰問題を浮き彫りにしていく。こうした国内農村窮乏問題は、関東軍による満洲支配を実効的なものとするために利用された。つまり、満洲国の成立によって、満洲国の関東軍と日本の満蒙植民論者との満洲農業移民に対する需要と供給が一致し、移民事業の発足につながっていくのである。

農民文学に対する伊藤永之介の関心も、そもそも出身地である東北農村の窮乏に端を発している。しかし、この伊藤の関心が、植民地文学を経て再び東北の農村を舞台とした農民文学へ

と帰っていくという事実をどのように考えればよいのだろうか。

李相瓊は朝鮮における「民族主義陣営」「社会主義陣営」それぞれの排華事件に対する反応を整理し、前者が問題を一部の民族主義の表出と捉え、「知識人たちは、無知な民衆に「万宝山地域事件」を朝鮮民衆と中国農民の間で発生した民族問題ではなく、それが中国政府と日本政府の間の外交問題であると論ずることが急務である」とし、問題の解決を朝鮮人農民の中国籍への「入籍」に求めたのに対し、後者は前者が「事態を階級的なものとして受け取らず、「満洲」における朝鮮農民が中国人地主に受ける抑圧を地主——小作人の問題として説明せず、中国人（満人）——朝鮮人（韓人）の問題として大衆に説明したことが排華事件を自ら招いた」と批判したことを指摘している。⁽¹³⁾

小説「万宝山」とそれをめぐる諸言説は、植民地文学から農民文学へとスライドする言説機構から見失われるものの一つに、こうした民族問題があることを浮き彫りにした。朝鮮の民族主義者たちがそうしたように、万宝山問題を中国と日本の外交問題としてのみ捉えていくと、そこに生起していたであろうさまざまな民族間の接触の痕跡は見失われていくことになる。作中に描かれた民族的多様性、すなわち、朝鮮人地主・小作農・日本人官憲・中国人農民・中国人官憲・苦力として描き出された人々相互の接触、そしてそこに飛び交っていたであろう複数の言語（日本語・朝鮮語・中国語）の存在を看取することこそが、

満洲における植民地近代を浮き彫りにしていくのだ。

しかし、同時にプロレタリア文学運動がそうしたように、問題を「階級問題」としてのみ捉えることも、実はこの隠蔽に加担していくことであつたのだ。

四 苦力という身体

小説「万宝山」では、作品後半で趙判世の回想が挿入される。それは趙一家が移住先の奉天を追い立てられ、流浪の旅に出るシーンであり、長男の大秀はまだ裴貞花の胎内にいた。荷物を質に入れてようやく手にした貨物列車の切符で一家はあてもなく北へ向かう。その列車には鉄道工事へとむかう大勢の苦力達が乗り合わせていた。彼らと共に家畜運搬車両に押し込められた裴貞花は、そこで大秀を産み落とす。

豚の糞の臭ひに息詰まる彼等の貨車には、苦力が一杯に詰つてゐた。鉄道工事に行く四、五百人の苦力達の巻添へで、趙は有蓋車に投げ込まれた。

戸口から吹き入る風に、蒼ざめた顔を晒らして、肩で息してゐた女房が、突然ガクツと首を折つて、ウン／＼唸り出した。

殴りつけるやうな風で、フワ／＼裳の裾から、赤黒い肉塊がのぞいた。

趙は子供のようにあはてた。

苦力が馬の小便に濡れた藁を握み出して、肉塊をその上に置いた。

赤子は喚いて、ピン／＼手足を動かした。

『棄てちまへ、どうせ満足に育ちはしねエ』

『余計な世話だい、黙つてスツ込んでろ、小兔子め』

世話好きな苦力が怒鳴つた。

趙はたゞ小さい肉塊を見入つてゐた。小指の尖ほどの鼻

と口――

苦力たちは面白がつた。

『え、子だぞオ』

『女の子だなア、こりやめつけものだぞ』

『心配すんない、手前のもんぢやねえや』

貨車が大きく動揺する度に、赤子はコロ／＼と藁の上から馬の小便でヌラ／＼する床に転げた。

『今にそこいらにぶつかつてくたばつちまはア、抱きなヨ』

趙は長々と牛糞の粘り着いた床板に仰向けにふんぞり返つた。

そしてポロ屑に包んだ赤子を、自分の腹の上に安置した。臍のあたりに肉塊のぬくもりが伝つた。

それでも趙は、貨車の烈しい動揺と響音が、今にも小さい生命を爆発させてしまひさうな気がして、息が詰まりさうだつた。(『万宝山』6)

ここでは趙一家と苦力達の触れ合いが描かれているが、この場面とは対照的に、作品の前半では、苦力たちは趙判世たちとともに水路の掘削工事に従事し、中国官憲に追い立てられる存在として、いわば作品の後景としてしか描かれていない。

逃げるひまもなかつた。バーツと飛沫のやうに逃げ散る苦力と百姓を蹴散らして、馬隊は疾風のやうに駆けぬけた。そしてまた戻つて来た。

野面で、汚れた白衣の百姓達が野鼠のやうに乱れた。悲鳴、叫び、呻めきがドドドツと地殻に轟く馬蹄にこんがらかつた。(『万宝山』2)

先の回想シーンで初めて苦力たちは言葉を持った存在として描かれる。しかし時系列で言えば、趙一家と苦力たちの交流は、工事が始まる以前のことであるのだから、結果としてこの小説は、そうした交流の失敗をも描き出している。だとすれば、まさにそのことが「万宝山」という作品を植民地小説の水準になぎ止めているといつてよいだろう。

ところで、万宝山事件に関する歴史資料の中で、この苦力の存在に言及したものはそれほど多くはない。管見の限り先に見た『産業労働時報』をはじめ、李輝英『万宝山』(注10参照)などに言及があるのみである。いわば、万宝山事件において、苦

力たちは不可視化された存在なのである。

南満洲鉄道株式会社経済調査会編『満洲の苦力』によれば、「苦力」という語は、タミル語を語源とする英語の「colly」あるいは「coolie」から来ているという。

今日吾々が謂ふ苦力とは満支人の不精錬労働者の総称であり力に頼つて生活をなす社会群「受苦累の人」の意であるが、この苦力と云ふ言葉が何うして労働者の意に通ずるやうになつたかについては人に依り説を異する。(南満洲鉄道株式会社経済調査会編『満洲の苦力』南満洲鉄道株式会社

一九三三)

苦力は中国語における労働者を意味する「做工者」「力作者」「工人」「小工」などと区別され、東インド会社の对中国貿易において取引の対象とされた労働力及び無資本の労働移民を指す言葉であつた(『満洲の苦力』同前)。そもそもは乾隆年間(一七三六―一九五年)ごろに端を發する農地不足および「封建的土地所有關係の矛盾が農業經營の零細化を助長」したことによつて生み出された「自給できない小作農民、いかえれば純然たる農業労働者」がその起源である。⁽¹⁴⁾

前出『満洲の苦力』に「満洲には鉄道港湾の荷役、土木建築の如き季節的に繁閑の伴ふ作業が多く、其間労働者の需給關係に著しき落差が生ずる、之を一例を以て示せば、鉄道荷役苦力

の如きである」と述べられているように、季節労働に従事する苦力たちは、仕事を求めて大陸を移動した。彼らは極めて低廉な賃金で雇用できたこと⁽¹⁵⁾から、満洲開發における重要な労働資源であり、趙判世たち朝鮮人農民たちに先だち、大陸を浮動する無資本の労働移民たちであつた。

彼らの移動手段は主に鉄道であつたが、「万宝山」にも描かれてるように、有蓋貨車に家畜とともに詰め込まれ、劣悪な条件で長時間の旅を強いられた。

此の苦力の為に發行する乗車割引券をば世人は特に四等票と呼で居る、露国時代鉄道經營の遺物である。余一日大連駅に此等苦力の実況を目撃したることあり、即ち有蓋貨車に一車につき七十人位を詰め込み煎餅布団を昆布巻きにせる彼等の集団は潮の押し寄せるが如くに貨車に集り来る、その光景は何とも形容のしようがない。(満蒙産業研究会編『満洲産業界より見たる支那の苦力』満洲経済時報社一九二〇)

夏目漱石が『満韓ところどころ』(春陽堂 一九一〇)において、「船が飯田河岸の様な石垣へ横にびたりと著くんだから海とは思へない、河岸の上には人が沢山並んでゐる。けれども其大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚らしいが、二人寄ると猶見苦しい。斯う沢山塊まると更に不体裁である」と描写した

ように、近代日本文学における苦力とは不潔の象徴であり、労働の最底辺として表象されてきた。たとえば、改造社社長山本実彦は、外遊中に目にした苦力の衛生状態について次のように述べている。

また、彼等の衛生保険の状態はどうであらう。ちよつと考ふれば、彼等はいへん不摂生であるから、罹病者の数がとも多いだらうと想像されるがそれがまた案外で在宿舎一萬人にたいし一日の病人が五・八人と云ふ統計を示してをるのである。これでも彼等の健康といふものが、どれだけ頑強であるかが分明するであらう。(山本実彦『満・鮮』)

改造社 一九三二

山本が、苦力たちが不衛生であるにも関わらず罹病率が少ないことを特筆するのは、彼らの頑強さが、朝鮮人労働者との間に賃金格差を生じさせるからだ。山本は、苦力を朝鮮人と比較し、「鮮人労働者は生活費が高く、体力において苦力に及ばぬものがあり、一ヶ月の労働日数も到底苦力に及ぶべくもないから、その対立抗争にはたいへんに骨の折れることである」(同前)と、その雇用にかかるコストの低さを評価する。

また、満蒙産業研究会編『満洲産業界より見たる支那の苦力』(前出)では、「苦力は病気の外は決して休むことはなし」とされ、その美点は「内地労働者を多数使役すれば少なくとも一、二割は

病気又は事故の為に休むのが普通である、然し苦力にはかかる恐れが至て少ない、勿論係累の少ない点もあるが、彼等は実に壮健無病である。吾々には到底飲めない濁つた水を平気で飲んで何の異状もない」と述べられている。しかしその一方でそうした彼らの「壮健」さは、「殆ど入浴しない」、「猫にも劣る」「非衛生的の生活」によつて裏付けられている。苦力が劣悪な環境に耐える労働力であることは、「非衛生」という言葉によつて表象されるのだ。すなわち、彼らの低賃金と、日本人の嫌悪感を誘発する彼らの「非衛生」は一体のものなのだ。

林淑美はプロレタリア作家里村欣三の小説「苦力頭の表情」(『文芸戦線』一九二六・六)を論じる中で、プロレタリア文学運動における「インターナショナルイズム」が、民族間における「(餓頭問題)」＝「異民族への嫌悪の項目、すなわち社会規範、所作身振り・食習慣を含む慣習行為、そして身体そのものなど、ふつう文化と呼ばれるもののずつと手前でその基盤をなすほぼすべての項目による異民族に対する差異化の欲望」を隠蔽し、「民族間相互に生ずる「賃金問題」を保持してきたことを批判している。林のいうように「民族文化の問題はまず(賃金問題)を通してあらわれた」のだとすれば、苦力達の「非衛生」の表象は、彼らの低賃金を温存する構造をもそのまま表象しているのである。¹⁶⁾

「万宝山」作中でも苦力たちは家畜の排泄物にまみれた存在として描かれている。しかしその家畜同然の衛生環境におかれ

た苦力たちの中で、その「非衛生」と汚辱の中から大秀は生を受けるのだ。苦力たちとともに満洲を移動する中で、趙判世たちは身体的なレベルにおいて、苦力たち下層労働階級と同化していく。

こうした描写によって初めて、苦力たちの存在は物語の後景としてではなく、生身の身体を備えた存在として見出されていくといつてよいだろう。苦力たちは一つの労働階級として表象され、知覚可能な存在となるのだ。しかし、この苦力の存在を公式化された階級闘争の図式に当てはめていくことは、逆にこの階級の表象を隠蔽することとなっていく。現実の万宝山事件において、苦力たちの存在が朝鮮人農民たちと互換可能なものとして不可視化されていったように。

こうした階級意識が民族意識を克服していくという構図は、プロレタリア文学が農民文学を包摂し、指導下に置こうとした構図と相似形を為すものであるのは見てきたとおりだ。だとすれば、農民文学の側からプロレタリア文学に投げつけられた次のような批判、農民作家犬田卯がプロレタリア文学に投げかけた批判を論じる内藤由直の次のような指摘は、まさにプロレタリア文学運動自体が孕む植民地主義の問題そのものをも浮き彫りにしているともいえるのだ。

マルクス主義に依拠したプロレタリア文学の担い手は労働者ではなく、それが目的とするのは権力奪取によって少

数前衛が支配階級として君臨することである。こうした運動主体と目的の錯誤ゆえに、マルクス主義は大衆化やヘゲモニーを必要とするのだ。犬田にとつてこれらは、プロレタリア文学の存在意義自体を消失させる致命的な矛盾であった。（内藤由直「第五階級の文学——犬田卯の農民文学／プロレタリア文学論」『立命館文学』二〇〇九・一二）

内藤は、日本における農民文学運動が、当初はプロレタリア文学との対立を乗り越え、揚棄しようとするものであったことを、犬田卯ら農民文学者の言説から明らかにしている。しかし、プロレタリア文学運動はマルクス主義に基づく組織論をその運動原理として撰取していくことで中央集権化し、農民文学は社会主義思想をひろめるための一手段として周縁化されていった。その過程で両者の共同の模索もまた、見失われていったという。こうしたプロレタリア文学運動の農民文学に対する姿勢は、収奪する都市とされる農村という「主従関係」を固定化し、再生産していくものであったと内藤は指摘している。すなわち、プロレタリア文学は当初から植民地主義をその運動原理に内包し、運動の実践において再生産するものであったのだ。そしてその植民地主義は同時に、植民地における民族問題を捨象していくものでもあったことは見てきた通りだ。

これに対し、伊藤永之介「万宝山」は、朝鮮人農民や苦力たちの具体的な身体描写から、この民族問題を浮き彫りにして

見せた。それは両者の間に横たわるわずかな差異を身体レベルで捉えるという作業でもある。

西川長夫は、植民地主義を考える際、そうした差異を生産していく機構を明らかにすることの必要性を次のように述べる。

（民族等の）差異は、今言ったこととは違う形で、資本と国家の本性から生まれるものであると考える必要があると思います。問題は、差異がどのようにして生産され、どのようにして統合され、共有されていくか、その点を見ていくことであると思います。（西川長夫『植民地主義の時代を生きつ』平凡社 二〇一三）

西川の言葉を手がかりにするならば、東北の窮乏と朝鮮農民の窮乏、両者の類似性とともに、その差異もしっかりと見極められる必要性があったはずだ。その差異の中からこそ、両者とともに植民地主義の問題として捉えることができるのだ。

しかし、朝鮮人労働者と苦力たちとの交流が、まさに回想の中でしか語られ得なかったことに象徴的に現れているように、農民文学を語る作家の意識は、結果としてこの差異を隠蔽していくことに加担したとはいえないだろうか。堀江信男が評価するように、その後の伊藤の農民文学への傾倒が、プロレタリア文学が農民文学に対して行使しようとしたヘゲモニーからの解放によってなされていたのだとしても、〈満洲〉という複数の

差異を抱えた身体が息づくトポスは、少なくとも作家の意識からは見失われたように思う。

「万宝山」はプロレタリア文学と農民文学との狭間にあって引き裂かれた作品であり、この両者の断絶をつなぎ合わせることは、そこに生起するわずかな他者との接触の記憶を手繰り寄せ、その痕跡を浮き彫りにすることによって初めて可能となるのではないだろうか。

注

（１）この契約では、県政府の認可を必要としていたにもかかわらず、郝はこれを受けておらず、また、開墾にともなう用水路建設には契約に該当しない地主の土地も含まれていた。

（２）ここで集められた朝鮮人たちは、みな故郷の土地を追われた自作農、あるいは小作兼業の自作農であった。これに対し、最初に土地を借りた九人の朝鮮人らは、日本総領事館監督下の朝鮮人民会金融部から開墾費用の三千元の融資をうけ、水田の設計や種籾九〇石を南満洲鉄道株式会社に仰いだことから、日本官憲と密接な関係にあったとする説（菊池一隆「万宝山・朝鮮事件の実態と構造——日本植民地下、朝鮮民衆による華僑虐殺暴動をめぐる——」『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』二〇〇七・九）もある。

- (3) 万宝山事件の経緯については以下の資料を参照した。緑川勝子「万宝山事件及び朝鮮内排華事件についての一考察」『朝鮮史研究会論文集』一九六九・六。朴永錫『万宝山事件研究——日本帝国主義の大陸侵略政策の一環として——』(第一書房 一九八一)。長田彰文「万宝山事件」と国際関係——米国外交官などが見た「事件」の側面『上智史學』二〇〇七・一一。李相瓊「一九三一年の「排華事件」と韓国文学」『植民地文化研究』二〇一〇・七。
- (4) 『満洲・万宝山事件(一九三一年)と中国、日本、韓国文学——李輝英・伊藤永之介・李泰俊・張赫宙——』『東京大学中国語中国文学研究室紀要』二〇〇四・四。

(5) 前出「万宝山事件及び朝鮮内排華事件についての一考察」

(6) 「朝鮮革命軍は(中略)万宝山入植の一般的朝鮮人農民に対して客観的に彼等が果たした役割を日帝の中国東北への出兵の口実を与えるものである」として糾弾し、即時万宝山から出て日帝と親日朝鮮人の手から脱するよう要求した。これは、彼らが「中国人との親善融和」によって在朝朝鮮人の生活を保障し「朝鮮革命」の発展を期するという考え方から出てきている(緑川勝子「万宝山事件及び朝鮮内排華事件についての一考察」前出)。

(7) 前出「満洲・万宝山事件(一九三一年)と中国、日本、韓国文学——李輝英・伊藤永之介・李泰俊・張赫宙——」

(8) 同前

(9) たとえば、松本武祝『植民地権力と朝鮮農民』(社会評論社一九九八)は、近代朝鮮における農村の状況について次のように述べる。

一九二〇年代から三〇年代前半にかけての朝鮮農業における最も基本的な特徴は、水稲生産量増加と農民の窮乏化とが楯の両面のごとく同時進行したことである、と筆者は考えている。

ところで、これまでの研究史における有益な成果のひとつとして、いわゆる「動態的地主」——すなわち、種子・肥料等生産手段や営農資金を小作農に前貸しし、かつ小作農経営の周到な管理を通じて水稲生産II小作料増徴を実現した日本人と一部朝鮮人大地主——論を挙げることが出来る。そして、そうした大地主の対極に、高率小作料と高利貸的債務に喘ぐ大量の零細な小作農が堆積していったと把握されている。

(10) こうした観点に立つて書かれた作品に中国人作家李輝英『万宝山』(上海 湖風書店 一九三三)がある。この作品は、伊藤永之介の「万宝山」に比べ、プロレタリア文学としての構図をより具現化しているように思われる。岡田英樹はこの作品についてつぎのように述べている。

「中・朝両民族の圧迫された民衆の連帯」というテーマを押し出すために、朝鮮人農民という事実を消して、水路工事を請け負った人夫頭と苦力の集団に置きかえた。したがって苦力たちは、水田の完成には直接的な利害関係はなく、水路を埋め戻す行動に躊躇なく結集できたのである。しかし現実には、土地を奪われ、耕作する水田を求めて移住してきた朝鮮人の農民たちである。一方は、自分たちの耕地に無断で水路を築かれ、水路の変更で生じるかもしれない洪水の恐怖に怯える中国の農民たちである。土地をめぐる農民たちの民族的対立は、双方とも死活問題につながる深刻なものであったはずだが、その側面がそっくり切り落とされ、階級的連帯に解消されてしまった。

岡田英樹「李輝英「万宝山」——事実と虚構の狭間」『立命館文學』二〇一一・二

(11) 堀江によると伊藤の「鳥類物」に見られる特質とは、「農村におけるさまざまな人物の織りなす関係を通過して、農村の生きて動い

ている姿を浮き彫りにする」「農民を個性としてよりも集団としてあつかう」「農村におけるさまざまな層の人々が密接に結びつき、からまりあつて存在するありようを、総体的にとらえる方向」にあるという（『伊藤永之介論』『解釈と鑑賞』一九八三・八）。

(12) 武田清子「加藤完治の農民教育思想——国民高等学校運動と満洲開拓団——」（『国際基督教大学学報 I・A 教育研究』一九六五・三）など

(13) 「一九三二年の「排華事件」と韓国文学」前出

(14) 可児弘明『近代中国の苦力と「猪花」』（岩波書店 一九七九）

(15) 「日本人夫費を二〇〇に対する満洲人夫、即ち苦力の指数は三三・三となる」（『満洲の苦力』前出）

(16) 林淑美「インターナショナルイズム」は〈饅頭問題〉を超えられたか——日本プロレタリア文化運動のなかの朝鮮」（『昭和イデオロギー——思想としての文学』平凡社 二〇〇〇）

付記

引用文中における旧字は新字に改めた。

なお、本稿は、立命館大学生存学研究センター特別企画「帝国の盛衰と日本人の移動」（二〇一三年二月六日）における発表内容に加筆修正をしたものである。当日、会場から貴重なご批判を賜った。記して感謝申し上げたい。